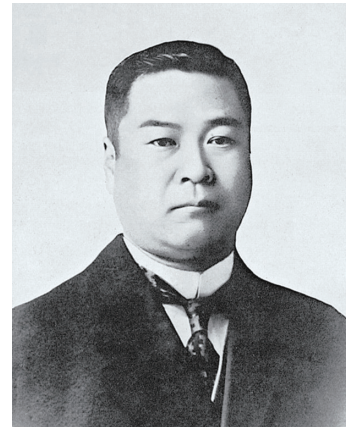




# 世紀を超えて 大切に受け継がれる 「共存共栄」の精神

かたおか りいちょう  
片岡 利一郎 (1874~1919年)



## ■共栄社化学 株式会社

本社所在地：大阪市中央区南本町 2-6-12 従業員数：270名  
創業：1904(明治37)年5月 資本金：2億1千万円  
事業内容：機能性モノマー・オリゴマー、金属工業用化学品、塗料添加剤、  
機能性高分子材料、クリーニング業務用品の開発・製造・販売

## 東京で過ごした青年時代

日本が近代国家への途を急速に駆け上がっていた1874(明治7)年、創業者の片岡利一郎は父・利三郎と母・はつの中に生まれた。片岡家は京都市下京区で、利一郎の祖父の代まで餅屋を営んでおり、宮内省御用達になるほどの老舗であったが、父・利三郎の代になると家業を廃して新たに三等郵便局を経営し、その傍らで若干の借家を持って暮らしを立てるようになった。

しかし、体が弱かった利三郎は、長男の利一郎やその下の4人の兄弟がまだ幼いうちに他界してしまった。女手一つで懸命に兄弟5人を育てる母を見て、利一郎は地元の修道尋常高等小学校を卒業すると15歳で社会に出た。

利一郎がはじめに働いたのは、京都の呉服商「外村商店」の東京店であった。地元京都を離れての暮らしは、まだ少年の利一郎にとっては辛いものであったが、東京の発展は目覚ましく、何もかもが刺激的であった。真面目な利一郎の働きぶりは、主人や先輩、同輩からも厚い信頼を得て、充実した青年時代を東京で過ごした。



片岡家の人々

## 大志を抱いて北海道へ

18歳になった利一郎は独立を決意し、丹後地方のちりめん織元を研究した後、京都の五条通りに足袋屋を開業した。しかし、大いなる野望を胸に秘めていた利一郎にとって、小さな商店の経営は決して満足できるものではなかった。自身のさらなる飛躍を目指し、利一郎は店を畳んで北海道へと旅立った。

北海道はその頃、開拓が進められている真ただ中で、全国から大志を抱いた若者たちが大勢集まった。1909(明治24)年には北海道最大の夕張炭鉱が採炭を開始し、北海道は活気に溢れていた。

開拓景気に沸く北海道で、利一郎はまず材木産業に携わった。その後、札幌で江州(現・滋賀県)出身の紙・雑貨店の店主と知り合ったことを契機に、郷里へ帰るまでその雑貨店で勤めた。

## 幼馴染と再会、石鹼との出会い

北海道の旅を終え、京都に戻ってきた利一郎は、隣家に住む村井吉兵衛と出会い、その成功ぶりを見て驚嘆した。7歳年上の吉兵衛とは、家が隣どうしということで幼少期から顔見知りではあったが、吉兵衛は1890(明治23)年に「村井兄弟商会」という会社を興しており、我が国初の西洋両切りたばこ「サンライズ」や、香料つきたばこの「ヒーロー」、輸入たばこの「バアジン」といったたばこで大成功し、世界有数のたばこ商として勇名を馳せていた。

吉兵衛もまた、身心ともにたくましく成長した利一郎を見て驚くとともに、真面目で行動力溢れる利一郎は事業を託すに足る人材だと見抜いた。そこで、たばこの他にも手掛けていた石鹼製造業を、利一郎に任せることにした。利一郎は吉兵衛の石鹼製造所に招かれ、販売担当責任者に抜擢された。

## 村井兄弟商会 石鹼事業を撤退

利一郎の担当は販売であったが、石鹼の製造工程や石鹼そのものの知識がなければ販売にも影響すると考え、関係書籍を読み漁ると同時に率先して工場でも働き、石鹼に関する技術を習得しようとした。西欧化が進む日本で、石鹼は今後必ず需要が膨らむと確信した利一郎は、石鹼に生涯を掛けてみよう、この時腹を据えたのであった。

日本に石鹼が伝来したのは1543(天文12)年、ポルトガル船が種子島に漂着した際、鉄砲とともに持ち込まれたと言われている。石鹼は鉄砲ほど日本に浸透せず、明治維新後になってようやく普及し始めた。明治中期、国内の石鹼産業は活発化し、1897(明治30)年には関西だけでも50もの業者がひしめいていたという。この中で勝ち残るのは並大抵のことではなく、事実、村井兄弟商会の石鹼事業も長くは続かず、ほどなく製造中止へと追い込まれた。しかし、利一郎は石鹼を諦めなかった。15歳で社会に出てからいくつもの職業を経験した利一郎にとって、石鹼はようやく巡りあえた天職であった。

## 「共栄社石鹼製造所」の創業

石鹼の起源については諸説ある。その中に、紀元前、ローマのサポーの丘で羊を生贄として焼き、神に祈りを捧げていた時に滴り落ちた羊の脂と木の灰が混じって、現在の石鹼に近いものができたという逸話がある。地名にちなんでサポーと呼ばれるようになったそれは、時代を経て現在のソープという言葉に転じたとされている。動物の脂と木灰を用いる石鹼製造法はその後数百年も続いたが、12世紀にはオリーブとバリラという海藻の灰を用いて、品質の高い石鹼が作られるようになった。これが、共栄社化学株式会社の生い立ちとも関係が深い石鹼の起源である。

石鹼産業の勃興期であった1904(明治37)年、5月5日、利一郎は今宮広田町(現・大阪市浪速区日本橋)で石鹼製造所の操業を開始した。新会社の社名は「共栄社石鹼製造所」とした。「協力一致、共存共栄」の願いを込めて利一郎がつけたものであった。



石鹼の金型



マルセル石鹼(復元)

## 洗濯用「ライトマルセル石鹼」誕生

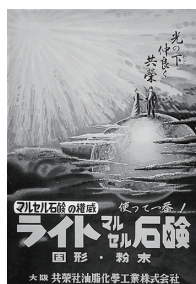
製造所の設備や販売の権利は村井兄弟商会から譲渡されたものであったが、経営に関してはすべて利一郎個人が指揮を執った。もともと村井兄弟商会が製造していたのは、マルセイユ石鹼と呼ばれる高級な繊維用石鹼で、元来オリーブ油の供給を支配していたフランス・マルセイユ地方で作られていた。日本では通称「マルセル石鹼」と呼ばれ、それがいつからか特定の商品を目指す言葉ではなくなり、“マルセル石鹼=高品質石鹼”という意味で使われるようになっていた。

これまでの経験からマルセル石鹼の市場が限られていることを熟知していた利一郎は、創業と同時により低価格で一般庶民の需要に応えられる洗濯用マルセル石鹼を製造し、「ライトマルセル石鹼」の商標で販売した。原料は当時手に入りやすかったオリーブ油ではなく、一般的な油脂を使用していたが、他社と比較して洗浄力が優れて安価な上、泡立ちが良く衣類が肌を刺激しないと評判となり、創業からわずかにもかかわらず人気商品となった。

## 高品質にこだわり続ける

ライトマルセル石鹼は純良洗濯用石鹼の代名詞として定着したが、それは本当の意味でフランスのマルセイユ石鹼と同品質のものが作られたわけではなかった。石鹼の品質に満足できていなかった利一郎は、品質改良のため、技術改良と原料油脂の精製に力を注いだ。

フランスで誕生した元祖マルセイユ石鹼はオリーブ油を使っているが、日露戦争終結後間もない日本で、オリーブ油をはじめとした原料が簡単に手に入るはずもなく、利一郎は代替品探しに奔走した。昼夜を問わず研究、試作し、失敗を重ねたが、利一郎は諦めずにひたむきに取り組んだ。様々な材料をしらみつぶしに調べた結果、とうとうヤシ油、椿油、山茶花油(中国椿油)、糠油がオリーブ油の代替品として有効であることを発見した。中でも山茶花油が最もオリーブ油の性質に似ていることをつきとめた。



ライトマルセル石鹼のポスター



登録商標「ライト」印



## 石鹼産業の発展を支えた時代

1 908(明治41)年、山茶花油を中心に配合分析を繰り返した結果、舶来の高級石鹼に引けを取らない良質かつ安価な製品の試作に成功した利一郎は、その翌年、高品質の純国産「マルセル石鹼」として販売を開始した。純国産石鹼の誕生は革命的な出来事であり、多くの業者が後に続けとばかりに追従した。

共栄社石鹼製造所の順調な業績拡大とは裏腹に、当時の石鹼業界の一製造所当たりの職工数はわずか7.7人で、まだ家内工業の域を脱しているとは言えなかった。利一郎は石鹼産業の発展のためにも新しい石鹼を作ろうと、再び研究と試作を重ね、粉末石鹼の乾式製法の発明に成功した。洗濯用には固形石鹼よりも粉末石鹼の方が使いやすいことにいち早く着目し、将来性を確信してのことだった。これにより、従来の粉末石鹼よりもはるかに良質で安価な粉末石鹼の製造を可能にした。

好調な業績を背景に、さらなる設備拡充が急務となり、1911(明治44)年に大阪府東成郡蒲生村(現・大阪市城東区蒲生)に工場と営業所を移転・合併した。当初は生駒にあった工場から移設した設備で操業していたが、利一郎は思いきって最新の設備を導入し、共栄社石鹼製造所は生産性を大きく高めていった。

1914(大正3)年、第一次世界大戦が開戦すると、戦乱によって欧州からの原料油脂や石鹼の輸入が途絶し、日本国内でシェアの高かった舶来の化粧用石鹼や高級繊維用石鹼の入手が困難となった。輸入石鹼に匹敵する高品質の石鹼を製造していた利一郎にとっては、市場拡大の絶好のチャンスとなった。

大正時代に入ると、石鹼製造に欠かせない原料の一つであるソーダが工業的に急速に発達し、それまで国内需要の3分の2は輸入に頼らざるを得なかったが、近代的な食塩電気分解法による生産に移行したことで一気に国産化が進んだ。第一次世界大戦勃発直後の1915(大正4)年における石鹼の国内生産額は当時の金額で857万円であったが、戦争終結後の1919(大正8)年には2,575万円と、わずか4年間で3倍にまで成長した。この間、輸出額においても129万円から437万円へと飛ぶ鳥を落とす勢いで急増した。



利一郎揮毫の「凡而事感謝也」  
「すべての事は感謝なり」という意味。

## 界面化学のスペシャリストへ

日本の石鹼産業の発展を見届けるように、1919(大正8)年4月、利一郎は46歳という若さでこの世を去った。

利一郎の逝去後、利一郎の遺志を受け継ぐべく会社を背負って立ったのは、親友の湯浅豊太郎だった。

大正から昭和初期にかけて、国民の生活水準向上によって、石鹼が洗濯用だけでなく浴用などの化粧用にも用いられるようになった。また工業用としての需要も拡大し、石鹼工業自体が油脂化学工業の主要部門として発展した時代であった。その中核を成すのは界面活性剤技術である。

大正中期には軍服製造に用いられる羊毛工業が発達し、羊毛専用石鹼が登場した。動物性繊維の代表である羊毛は動物特有の油や汚れを落とさなければならず、専用の石鹼は不可欠だった。また、羊毛は物理的な力を加えることによりフェルト化するという特徴があり、それは繊維として扱うには欠点でもあった。この性質を改良して繊維としての性質を高めるためにも石鹼などの界面活性剤が必要だったのである。

繊維工業用洗浄剤の将来性を見込んだ同社は、その後各種繊維用油剤の開発にも精力的に取り組んだ。利一郎が手腕を振るっていた時代から研究を続けてきた羊毛工業・紡毛用としての調合油、精練操作用としての精練剤や仕上剤などの繊維処理剤の製造に着手し、界面活性剤のスペシャリスト企業として一步を踏み出した。

創業から114年を数えた今、利一郎の石鹼製造から始まった同社は、長きに及んで培ってきた技術を生かし、世界中の多様なニーズに応えるべく、クリーニング洗剤、製造釜洗浄剤、金属工業用化学品、機能性モノマー・オリゴマー、塗料添加剤など、多岐にわたる助剤・添加剤事業を展開している。今日の同社の発展は、顧客や社会との共存共栄を願いつづけた利一郎の思いそのものなのである。



片岡清夫代表取締役社長の挨拶

2004(平成16)年には、創業100周年記念式典と記念パーティーが開催された。